

A 大学における一人前看護師育成プロジェクトの評価-看護の統合と実践受講有無による比較-

大久保友香子 小松光代 光木幸子 植松紗代

和泉美枝 杉原百合子 眞鍋えみ子 岡山寧子

【目的】

A 大学では附属病院と協働し看護学科 4 年生～卒後 3 年を対象とした一人前看護師育成プロジェクトに取り組んでいる。その中で H22 年よりシミュレーション学習や客観的臨床能力試験(以下 OSCE)から構成される看護の統合と実践を選択科目として開講した。本報では卒業時看護実践能力経験到達度(以下到達度)、附属病院入職後の OSCE 成績から卒前教育の評価を行う。

【方法】

対象は A 大学卒後附属病院に入職し 9 カ月目に OSCE を受験した 33 名(看護の統合と実践の受講者 11 名、非受講者 22 名)で、うち 6 名は手術室や小児領域の特殊病棟勤務(以下特殊)である。調査内容は(1)卒業時到達度:看護実践能力育成の充実に向けた大学卒業時の到達目標(2004)より 81 項目。4 段階評価(単独でできる～できない、3～0 点)、1)ヒューマンケアの基本(8 項目)、2)看護の計画的展開能力(7 項目)、3)健康問題保持者への実践能力(51 項目)、4)チーム体制整備能力(10 項目)、5)実践で研鑽する能力(5 項目)の得点率を算出。また 3)は 10 の小項目毎に得点率を算出。(2)入職後 OSCE 成績:課題は糖尿病合併肺炎患者への解熱剤投与と血糖測定であった。評価指標は 29 項目で医療安全の確保(18 点)、患者及び家族への説明と助言(19 点)、的確な看護判断と看護技術の提供(20 点)の 3 領域毎に得点率を算出した。統合と実践受講の有無、さらに一般と特殊に分けた配属先別で(1)(2)の得点率を Mann-Whitney で比較した。倫理的配慮は A 大学倫理審査委員会の承認を得た。

【結果】

到達度得点率は受講、非受講順に 1)ヒューマンケア 81.4%、80.7%、2)計画的展開力 62.8%、67.7%、3)特定健康問題への実践力 48.1%、50.5%、4)チーム体制整備力 45.8%、48.6%、5)研鑽力 60.0%、48.2% で有意差はないが 5)では受講者が高い傾向であった。また 3)の小項目「危機的状況への援助」受講 41.2%、非受講 23.5%で受講の方が有意に高かった( $p<.05$ )。OSCE 得点率は受講、非受講順に医療安全 73.2%、67.9%、患者家族説明 78.5%、70.1%、適切な判断技術 71.8%、70.5%と有意差はないものの受講者が高かった。配属先別では一般、特殊順に医療安全 70.4%、66.7%、患者家族説明 74.3%、66.7%、適切な判断技術 72.6%、63.4%と有意差はないものの一般が高かった。

【考察】

卒後へのつながりを意識した科目の開講は、「危機的状況への援助」の卒業時到達度からはその効果を確認できたものの就業後 9 カ月の OSCE 成績との関連はなかった。これより看護基礎教育において卒後どのスパンのつながりを視野に入れて科目を展開するかその内容及び評価方法は今後の課題である。本報は文部科学省 H21 年度助成事業「看護職キャリアシステム構築プラン」の一部である。